
東方攻吸劇

ナイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方攻吸劇

【Nコード】

N9236U

【作者名】

ナイト

【あらすじ】

俺の名前は椎名離着。（しいなりき）

そしてここは幻想郷。

この世界には一人一人に能力があるらしい。

そして俺にも。

俺はある時ここに来る。

そして使命を託された俺。

今日もこの世界では、始まりが生まれる。

プロローグ〈story start〉

ここは湖か？

俺が最初に出した言葉がそれだった。

どこからか子供の声。

またどこからか爆発音。

「パソコンの前で寝てただけなのになぜこうなった。」

「まったく、仕事途中なのになんでこんな所にいるのだろう。」

自分でも分からなかったがこの事態は非常におかしい。

なにせあそこは都会だ。

なのに今周りを見ても見えるのは山や森のみ。

しかし、その思考はいきなり途切れさせられる事となる。

そう、『それ』が前にいたから。

沈黙。

そう一言で表そうか。

まあ、いきなり前に金髪色の髪をした少女が前にいきなり現れたら

そうなるが。

「あなたね。」

「あなたが、この世界の救済者。」

「.....」

彼女は何を言ってるのか分からないが、なにかここではとんでもないことが起きてるらしい。

「君は誰？」

「私はこの幻想郷の案内人ですわ。」

「幻想郷？案内人？」

「そう、あなたは自分の能力に気が付きなさい。」

「？」

なにかよく分からないが、一応きいておく。

「あなたの名前は？」

「私の名前を知るには、私と再び会うことね。」
そして彼女は、

消えた。

変化 Change

前から姿を消した彼女。

そして一人となった俺。

「こんな世界でなにしろつつんだよ。」

しかしずっとここにいても何も起きない。

そう感じた俺は湖を去ることにした。

しかしその思考も、完璧に無き夢となった。

頬をなにかがすめたからだ。

かすめたものの正体は『氷』

そして頬から滴り落ちる鮮血。

現状はつかめない。

「んーなんだこいつ。カエルかと思ったら人間かー。」

「ん~~~~~!!!」

いきなりの攻撃に混乱してしまう。

やばい、動揺が隠せない。

「お、おおおお前はだれだッ!!」

「アタイ?アタイはチルノ。」

「最強なのはこの私よ!!」

なんだなんだ。

(早くもこの世界の最強に遭遇しちゃったのか。)

(早く逃げない!!)

俺はとつさのことチルノに背後を見せる。

しかし、攻撃がとまることはない。

後ろから3つの氷が襲ってくる

奇跡的な反射速度のため、頭を下げただけで回避できた。

だが、2度目はない。

ここから逃げるのは無理だ。

もうここで最強とやらにやられるしかない。

「なんだ、もう終わりなの？」
「じゃあこれで凍っちゃえ！」

『パーフェクトフリーズ！！』

チルノの周りに氷が停滞し、その無数の氷が一斉に俺に向かい飛んでくる！

しかし、その氷が自らの体を貫くことはなかった。

自分の左手から上半身しか守れないほどの魔法陣が出て、氷を吸収したからだ。

『え？』

2人はほぼ同時に驚愕する。

チルノは当たらずの氷があたらず、

俺は自らの命がまだ終わっていないことに対してだ。

そして俺の左手から出ていた魔法陣は消失する。

「なんだ今のは、なんなんだ。」

「それはアタイのセリフよ、あんたなにしたの！」

これがあの人が言ってた能力？

まだ確証ではないがあるいは……。

だがまだ何か隠されている。

そんな予感がした。

本当にそれだけ。

だが俺は無意識に右手を突き出す。

「？」

「なんか知らねえが、俺は生き残りたい！」

そして右手からもその魔法陣が出現する。

そしてそれを放出する。

あれからどれほどたったのだろう。

次に見たのは天井だった。

その天井は恐ろしいほどに紅く、奇妙だった。

「お目覚めですか。」

「ハッ！！」

そこにいたのは一人のメイド。

しかしさつきまで気配を感じなかった。

俺が口を開くまえに彼女が告げる。

「ここは紅魔館、レミリアお嬢様の館。」

さて、と

また変な名前が出てきた。

「紅魔館・・・ここまで運んだのは。」

「めいりんという門番ですわ。」

「遊びに行くところ、とけたチルノと一緒に倒れてた所を見たとききました。」

「また門番を休みやがって・・・。」

俺は謎の殺気に押される。

「あの一、お姉さん？」

「はい。」

「その殺気を納めていただきたいんですが？」

「おっと失礼しました。」

すぐさま殺気が消え去る。

やっと話せるな。

「なるほど、俺は助けられたわけか。」

「助けてくれてありがとう。」

もうすこしで死ぬ所だった。

「私が助けた訳ではないので。」

「申し送れました。私の名は十六夜咲夜。以後お見知りおきを。」

「俺の名前は椎名離着。いろいろあってこの世界に来た。いや訳は

ない。」

「急に連れてこられたからな。」

「またあの方ですか。」

「また？」

「いいえ、なんでもございませぬ。」

「それよりも、おなかはすいていますか？」

「ぺこぺこだよ。」

「ではまず食事から始めましょうか。」

「こちらに。」

この世界に来て1日、俺は明らかな変化を悟る

変化(Change)(後書き)

ナイト「まあ、今日これを書き始めたわけですが……俺は初心者だ。(以下ナ。)」

椎名「そんなの知るか。お前が始めた事だろう。(以下椎。)」

ナ「まあそれはさておき……能力の名前をいつだそう。」

椎「はあ？早く教えてくれよ。気になって眠れねえよ！」

ナ「ま、まあ待て、あらずじで能力紹介をしなかった事を後悔しないとな。」

椎「まったく……。」

ナ「いつそこで教えるか。」

椎「おいやめろ。」

ナ「分かってるよ、早めに教える。」

椎「それにしても……お前のチルノ愛がすごいな。」

ナ「当たり前だろ。チルノは俺の嫁だ異論は認めん。」

椎「うっ、凄まじい熱気。」

ナ「こうして、物語は始まるのだった。」

椎「……かつこう付けは不要だ。」

ナ「……ばれたか。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9236u/>

東方攻吸劇

2011年10月9日01時52分発行